新しい映像教材の開発を目指して
－学習者の専門に配慮した授業の試み－

橋本　智　　山木　眞理子　　古賀　美千留
HASHIMOTO, Satoshi　　YAMAKI, Mariko　　KOGA, Michiru
徳島大学国際センター

要旨：
医学・歯学・薬学系の学部および大学院に所属している日本語学習者を対象にしたクラスで，留学生が専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる効果を期待して，医・科学系の映像素材を使った教材を作成し，授業実践を試みた。実施後の調査では，映像を使用した授業に対する興味・関心は高かったものの，内容は必ずしも医・科学系の映像でなくてもよいという反応も見られた。教師の振り返りでは，教材の選定と作成とに多くの手間と時間がかかることがわかった。今後はこの結果を踏まえ，より学生のニーズに合った，日本語の運用能力を伸ばす教材の開発が必要であろう。

キーワード：日本語教育，映像教材，教材作成，日本語運用能力，専門教育

1．はじめに

本研究は，医学・歯学・薬学系の学部および大学院に所属している日本語学習者を対象に行なった映像教材を使用した授業について，実践報告および活動の効果・課題の検証を行うものである。

1.1　研究の背景および先行研究

徳島大学において医学・歯学・薬学系の学部や大学院で学んでいる留学生（以下，「医歯薬系の留学生」）は，「自身の大学生活ではほとんど日本語は必要としていない」と考えている。一方，彼らを指導する教員からは，留学生の日本語力の向上の必要性について声が上がっている。

医歯薬系の留学生の日本語に求められるニーズは，生活場面・研究場面で大きく異なる。生活場面での日本語は，通常の日本語クラスでの学習で対応可能であるが，専門的な場面で使われる日本語については，クラスでのサポートは難しい。学習者の研究分野の違いによって，日本語の使用が求められる状況・語彙が異なることが予測されるからである。現在の福祉・看護の分野での専門日本語の指導のような画一的な指導を行なうことは，大学・大学院で専門性の高いそれぞれの分野で学んでいる留学生の指導としてはあまり効果的ではないだろう。

そこで，医歯薬系の留学生が興味を持って取り組めると予想されるトピックをテーマにした映像教材を使用することで，学習者の通常の日本語学習の助けのみならず，専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる効果が期待できるのではないかと考えた。

映像を使った教材の利点として，「学習者の興味を引き出す，授業を活性化する」ことが大坪(1990)で指摘されており，保坂・土井(2001)の学習者へのビリーフ調査でも確認されている。

テレビドラマやドキュメンタリー等，教育用に加工されていない，生の映像教材を使用した日本語教育における授業実践は，これまでにも報告されている（有賀(1990)，高橋(2006)，田中(2007)など）。しかし，これらは一般的な日本語使用場面での日本語習得を目的に実践されており，学習者の専門や研究場面に配慮したものではない。

専門教育場面での日本語に配慮した映像教材を用いた授業の研究としては，吉岡(1992)が挙げられるが，吉岡(1992)は「専門教育への橋渡し」のために，人文社会系学部で学習する留学生を対象に作られたビデオを使用し，そこで使われている語彙・用語の習得に主眼が置かれている。つまり，本稿で扱うような，「留学生のために加工されていない映像」を使用し，「専門分野へのアクセス」を視野に入れた映像教材を使用した日本語授業に関する事例は，管見の限りでは見受けられず，新しい試みであると言える。

1.2　研究の手がかり

本研究では，この新しい試みである「専門分野の日本語にアクセスしやすくなる効果を期待した，映像素材を使用した授業」について，次の3点を研究の手がかりとしたい。

a.教師が選択した映像および作成教材は，

学習者にとって「役に立つ」もの，「興味をそそる」ものだったのか

b.映像を使用した教材を作成・使用する際の注意点・困難点とはどのようなものか

c.今後，このような映像教材を使用した活動は，どのように発展可能か

これらは，授業実践における教師側からの気づき，および学習者へのアンケート，フォローアップインタビューをもとに考察していく。

以下，2 節では，映像教材を使用した授業についての概要や各授業での詳細について述べる。3 節では，授業準備・授業中・授業後の各段階での教師側からの気づきについて，4 節では，授業についての学生側からの意見を，アンケートとフォローアップインタビューをもとに分析する。

2. 授業の概要

2.1 全学日本語コースの概要

徳島大学国際センターでは，大学院生，研究生，研究者やその成人家族を対象に全学日本語コースを開講している。レベルは初級から中・上級まであり，初級は A1・A2・B1・B2 の 4 つのクラスに分かれている。中級には C1・C2 があり，必要に応じて上級の D クラスが開講される。授業は基本的に週 2 回行われ，国際センター所属の教員によって運営されている。

徳島大学は大きく分けて 2 つのキャンパスに分かれている。常三島キャンパスには，総合科学部と工学部があり，蔵本には医学部，薬学部，歯学部がある。全学日本語コースは両方のキャンパスで同時に開講されており，留学生はプレイスメントテストに合格すれば，各自の状況に応じて授業を受講することができる。

本稿の映像教材を用いた授業は，蔵本キャンパスの C1 クラスで行われた。蔵本 C1 クラスは『みんなの日本語』第一本冊と第二本冊（以下 I・II）が終了した留学生を対象にしたクラスで，中級クラスの位置づけがされている。授業開始当初は 12 名の登録があったが，研究や実験などの理由で，映像の授業が行われたときには 2 名が定期的に授業に参加している状況であった。

映像教材を使った授業に参加したこの 2 名の留学生は，学期の初めにプレイスメントテストを受け中級レベルと判定され，2009 年度秋期の C1 クラスを受講している。共に女性の医歯薬系の留学生で，母語はそれぞれモンゴル語と中国語である。

蔵本 C クラスでは『みんなの日本語中級 I 本冊』が使われている。これは A1 から B2 までのクラスで『みんなの日本語初級 I・II』が使われており，語彙や文法項目で継続性があり学生にとって見慣れた教科書であること，体裁としては文法項目中心ではあるものの授業では教師が必要に応じて発展させやすい内容であることなどを考慮して選択された。

全学日本語コースは，半期で 10 週 20 回程度行うことになっている。蔵本 C クラスでは『みんなの日本語中級 I』を 1 年で終わるように計画を立て，今期の蔵本 C1 クラスではこの教科書の前半の第 1 課から第 6 課までを学習した。

2009 年度秋期（2009 年 10 月 20 日～2010 年 2 月 2 日）では，教科書に基づいた授業以外に，他の活動ができる時間を数時間設けることができた。そこで，既習の文法項目や慣用表現を使ったロールプレイも取り入れたが，専門に配慮した映像教材を試験的に導入してみてはどうかということになり，本研究を行うことにした。

今回，教材に使う映像は「医・科学系」に絞ることとした。対象が医歯薬系の留学生であるため，授業ではこれまでにも医療用語が含まれた例文，医療関係の場面設定，語彙などを積極的に使用してきた。これは，留学生の実際に日本語を使う場面を想定したこと，また留学生の動機づけを高めるために行っていた。今回の映像教材の提示でも，学生の興味関心はおそらく医学系のものにあるだろうと想定し，医科学系の番組から 3 つの映像を準備した。

2.2 映像教材を使った授業について

映像教材を使った授業は，コース全体の全 19 回の授業のうち，後半の 3 回（90 分×3 回）を使って行われた。実施日は 2010 年 1 月 19 日，26 日，29 日の 3 日間である。

映像素材として使用した具体的な番組・DVD 名は，次のとおりである。なお，放送日等詳細は本稿末に掲載した。

「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）
「サイエンス ZERO」（「疲労に迫れ」）
「プロフェッショナル・仕事の流儀」（「鳥インフルエンザを封じ込めろ」）

いずれの番組も時間が長く全部を視聴するのには無理があるため，教室での視聴は学習者の負担を考慮して，内容的にまとまりのある 5 分程度を基準に抽出することにした。

実施にあたっては 2 名の教師が交代で授業を

行った。ほぼ同じ条件下で3つの映像教材を見せ，学習者にとって「役に立つもの」，「興味があるもの」を調べるために，事前に綿密な打ち合わせを行い，授業形式などの統一を図った。統一した点は（1）視聴前活動（2）授業形式（3）配布資料の3点である。

（1）視聴前活動について

今回の映像教材は医・科学系の専門用語が多く，普段の学習内容とは全く異なるため，学生にとっては理解しにくいものであることが予想された。そこで，視聴の前には導入として，必ず以下の3点を行うこととした。

1．英語・中国語訳付きの語彙リストを配布。全員で音読しつつ語彙の確認を行う。
2．学生に意味や使い方が分かり難い語彙がないか尋ね，そのような語については例文を提示しつつ理解を図る。
3．視聴の前には，必ず「視聴のポイント」を提示する。

（2）授業形式について

基本的な授業の流れは，次の通りである。

〔導入〕
1．それぞれのテーマを意識化させるためのQA
2．語彙の確認（語彙リスト使用）
3．視聴のポイントの提示

〔展開〕
1．通し視聴（1回目）
2．内容の理解度の確認
3．文法の学習（タスクシート使用）
・音声を聞きタスクシートの穴埋め
・短文の作成など学習活動
4．内容の確認（質問シート使用①）
5．通し視聴（2回目）

〔まとめ〕
1．内容の最終確認（質問シート使用②）
2．アンケートの実施と回収
3．映像教材に基づいた話し合い

ただし，実際の授業ではそれぞれの内容に応じてカスタマイズした点もある。これについては，項を改めて述べる。

（3）配布資料について

配布資料は，以下の物を統一して揃えた。

1．語彙リスト（英語・中国語訳付き）
2．タスクシート
中級の学習項目を抽出し，その部分を空欄にした問題など。主にリスニング時と文型練習時に使用。
3．質問シート
4．全文スクリプト
学生が帰宅後，各自で授業の振り返りをするために配布。

授業案，ならびに配布資料，アンケートについては，本稿の最後に授業1回分を資料として添付する。

次に，それぞれの番組の内容と特徴，および授業を実施するにあたってカスタマイズした点を説明する。

2.2.1　授業①

「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）

このテレビ番組は，男性と女性では生まれつき持っている染色体の数が違うため，「赤」という色の見え方が異なっていることを最新の研究に基づいて紹介したものである。内容は比較的難しいが，図解が多くお笑いタレントが進行役を務める娯楽性の強い番組である。

語彙としては「染色体」「遺伝子」「遺伝情報」「細胞」などの専門用語が多く使われており，これらは特に語彙リストに取り出して学習した。文法では，①連体修飾節　②「一方」　③「VというN」をタスクシートに抽出し，リスニングと文型の学習を行った。

この授業ではまず学習項目に焦点を当て，タスクシートで文の作り方を練習してから，リスニングで空欄を埋めるという手順で学習した。

2.2.2　授業②

「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）

この番組は，疲労の正体や疲労と脳との関係を一般向けに紹介した科学番組である。説明は図を用いて解説される部分もあるが，その割合は授業①の「解体新ショー」よりも少ない。

語彙では「視覚野」「聴覚野」といった脳に関係する専門用語や，「感覚」「刺激」「機能が低下する」などの語を語彙リストに抜き出して学習した。文法の学習では，①「～かどうか」②「～しようとする」　③「NのようにV」　④「～たにも関わらず」をタスクシートで学習した。この授業では，まずリスニングでタスクシートの穴埋めをしてから，学習項目を短文作文

などで学んだ。

2.2.3 授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」(「鳥インフルエンザを封じ込めろ」)

この番組は，WHO でメディカルオフィサーとして働く新藤奈邦子氏の仕事を紹介したドキュメンタリーである。特徴としては，ナレーションが短く簡潔で，文体は常体を使用している。また，難しい専門用語も多いため，中級の学習者にとっては難易度がかなり高いものといえよう。語彙リストには「ラッサ熱」「リンパ腺」「隔離病棟」「体液」などといった言葉を抜き出し学習した。

この授業を行うにあたり，特にカスタマイズした点は以下の2点である。

・授業①②では「〔展開〕4．内容の確認」で初めて使用した質問シートを，この授業では「〔展開〕2.内容の理解度の確認」時から前倒しで導入して使用した。これは番組の難易度を考慮し，学生に前もって目に見える形で手掛かりを提示しておく必要があると判断したためである。

なお，この質問シートは2回目の通し視聴直前にも再度用い，内容の最終確認時を含めると全部で3回使用した。

・授業①②ではタスクシートで「文法」を扱ったが，この授業では「文章の特徴」を扱った。

この番組のナレーションは一文が大変短く，中級で扱う文法項目がほとんど現れない。そこで，中級の学習者向けには，このような短い文章がもたらす効果に気付かせる学習活動をしてみることにした。

3．教師の気づき

本節では，実際に授業を準備・担当した教師の気づきをもとに，授業の準備段階・授業中・授業後の各段階において，日本語教師が映像教材を授業で使用する際の注意点・困難点について考える。

3.1 準備段階

まず，準備段階における教師の気づきとして多く挙げられたのは，「授業の準備のための負担が予想以上に大きい」という点であった。3回の授業後のコメントで重複するものが多いため個別の紹介は省略するが，この準備とは，大きく「①映像教材を作成するための準備」と「②授業で映像を見せるための準備」の二つに分けることができる。

今回，「①映像教材を作成するための準備」としては，各授業で次のような作業を行なった。

映像教材作成のための準備（時系列順）

① テレビ番組・DVD の選択
② 授業で扱う場面（5分程度）の選択
③ 映像の文字起こし
④ 語彙の確認
⑤ 語彙リストの作成（語彙の中国語訳，英語訳の添付）
⑥ 文法項目の確認（既習／未習，レベルの確認）
⑦ 授業案の作成
⑧ タスクシートの作成
⑨ 映像の切り取り（視聴映像全体と各タスクシートでの使用部分）
⑩ 質問シートの作成

様々な作業がある準備工程の中でも，まず，テレビ番組・DVD を探し選択することが第一の壁であった。映像教材として使うためには，今回の授業の目的である，「学生が興味をもちそうなテーマ」「学生の専門につながるようなもの」という基準だけをクリアすればよいというだけではなく，実際には内容や語彙の難易度など，さまざまな確認すべき事項がある。生教材であるテレビ番組・DVD が，学習者にとって理解しやすい日本語で構成されている・配慮がなされているということはないため，授業の担当者が映像がクラスで学習できるレベルかどうかを判断しなければならない。

また，テレビ番組選択に関しては，「取り扱える媒体に制限がある」「映像収集の大変さ」ということも障壁の一つである。現在では，Web 上で過去に放送した番組を購入し視聴することができるシステム（「NHK オンデマンド」など）が各テレビ局で採用され，数多くの現在・過去のテレビ番組にアクセスすることが可能である。しかし，これらの番組は，著作権上の問題から録画が認められていないことが多いため，授業での使用は難しい。つまり，「使いたい番組」が「使える番組」とイコールではないということである。今回の試みでは，教師が録画していたテレビ番組，および放送後に市販されている DVD から授業を作成した。ただ，授業の再生可能性という点から考えれば，市販されている DVD などの媒体を使用する場合には問題は少ないが，個人が録画したテレビ番組を使用した場合には，映像の紛失などの問題が

一旦起きれば，授業のための資料が手元にあったとしても作成された授業資料がその後使用できなくなるといった恐れも高くなるだろう。

また，準備段階で大変なこととしては，授業で使用する資料等の作成に関する問題も挙げられる。映像を使用する授業では，教科書等を使用する授業よりも多くの資料を作成することになる。さらに，資料を作成する前段階として，番組の使用部分の文字起こしをし，文型や語彙について確認をするといった作業も必要であり，教師にとっては負担が大きい。また，今回の授業においては，語彙リストの訳だけでは理解が難しいと思われる語彙（「等高線」「濃い・薄い」「微妙」など）を説明するために，絵や実物を見て理解できるものを用意するなどの配慮も必要とされた。加えて，授業で取り扱いがしやすいように，映像を適切な長さに加工する必要もある。これには，パソコンに映像を取り込み，ソフトウェアを使って使用したい部分だけを切り取るという作業が含まれた。以上が，「①教材を作成するための準備」に関わる問題点である。

さらに，「②映像を見せるための準備」として，教室で使用できる機材の確認や，パソコン，プロジェクタ等のセッティングも行った。

今回の授業で使用した教室は，映像教材を見せるための設備が十分ではなく，授業のたびに教師が必要な機材を持っていき，セッティングをしてから授業を行なう必要があった。これは映像等を授業で取り扱う授業では通常行なわれている作業であり，機材を扱うことが苦にならない教師にとってはそれほど負担にならないと思われるが，機材の扱いに慣れていない教師はこの種の作業を面倒だと考え，映像を使った授業を行なう障壁と考える場合も少なくないだろう。

3.2 授業中

授業中の教師の気づきとしては，主に，個々の授業での問題が報告された。具体的な内容について，以下の表に記す。

授業①	・受講者の日本語レベルに差があったため，授業の進行に配慮が必要だった。 ・文法の学習中に，短文がなかなか作れなかった。タスクの順番を変えたほうが良かったかもしれない。(今回は[作文→リスニング→タスクシートの穴埋め] の順) ・予想以上にディクテーションができなかった。普段の授業でのリスニングと比べて歴然とした差を感じた。（特に「という」の聞き取り。） ・質問シートの問題に答える際，「映像からわかったこと」を答えるよりも，「タスクシートで抜き出してある文を読んでわかったこと」を答えていたような気がする。
授業②	・導入部分で，留学生からたくさん発話があった。 ・文法の学習がスムーズだった。既習文型が多かったからなのか，教える順番のせいなのか？（[リスニング→タスクシートの穴埋め→作文] の順で実施） ・内容が難しかったのか，一回目の通し視聴ではほとんど聞き取れなかった。QA もほとんど答えられず，前回とは違う。
授業③	・準備は大変だと感じたが，授業自体は意外なほど楽にできた。ただ，短い授業時間の割に使用する資料が多く，配布に手間取る場面も。 ・語彙が留学生にとっては予想以上に難しいと痛感。授業では，口頭で例文を提示し，説明した。（リストの読み上げだけでは，難しい） ・「文体」についての気づきを求めたが，やはり難しかったようで，教師側からの説明に終始した。 ・使用する映像を事前に切り取っていたため，授業での機器の取り扱いに手間取ることはなかった。

授業①と②については，同じ教師が連続して担当したため，授業でのコメントについても連続性が見られる。使用した映像の違いによって，よく聞き取れたもの・そうでなかったものの差はやはりあるようだ。

また，タスク・文法については，すべての授業で共通して反省のコメントが出された。提出順序によって回答に差が見られた，タスク自体が難しかったのではないか等といった点である。これらについては，今後，再検討・改善が必要であろう。

授業中の機器の扱いについては，特に「難しかった」というコメントはなかった。映像の頭出しで無駄な時間を作らないために，事前に映像を切り出す作業をしておいたことが効を奏した結果であろう。

3.3 授業後

授業後の気づきについては，映像教材を使った授業全体の運営に関わる反省，個別の授業への反省などがコメントとして挙げられた。その具体的な内容は，右の表の通りである。

授業における個別の反省で多く見られたコメントは，「ポイントになる語彙の定着ができていれば」，「語彙リストの情報を増やしてはどうか」といった，語彙に関わることだった。また，授業後に，学習者から映像についてのコメント，感想などが寄せられたという点も興味深い。「運用に結びつきにくい」といわれる映像を使った授業でも，授業で学習した文法などをその後使用するという種類の運用ではなく，学習者の自然な発話を引き出すという「運用」については有効に働くのかも知れない。

映像教材を使用した授業全体についての反省として，アンケート実施の際の注意，授業間隔の短さへの指摘，ニーズ調査の必要性などが挙げられた。これらの点については，次回以降の課題として検討する必要があるだろう。一方，授業準備の負担の大きさに比べ，実際に授業を行なう負担は（機器の取り扱いも含め）それほど大きくなかったという回答であった。

授業①	・アンケート記入時に，留学生が十分問題の内容を理解できていないのに記入を始めてしまい，後からもう一度質問の内容を確認するということがあった。注意が必要だと思った。 ・授業後に授業の感想や映像教材に関する感想が留学生の方から出てきて，有意義な話し合いが出来た。
授業②	・導入段階で，「視覚」「聴覚」ということばをもっとしっかり定着させておけば，理解度がもう少し上がったかもしれない。 ・内容が難しかったようで，前回のような活発な教室活動につなげることができなかった。
授業③	・語彙が留学生にとって予想以上に難しいと痛感した。語彙リストには英語・中国語の訳をつけたが，やはり例文も加えたほうがよかったかもしれない。（授業中には例文を提示して対応） ・授業の準備自体は大変だったが，授業はスムーズに運営できた。機器の使用も問題はなかった。 ・授業後，留学生から「このビデオはどこで買えますか？全部見たいです。」という質問があった。 ・授業後，映像教材に関する感想の声が自然に上がった。映像教材のテーマについて会話が弾んだ。 ・短期間で 3 回の映像を用いた授業を行なったので，留学生に疲れもみられた。次回以降は，間隔を置いて授業を行なえればいいと思う。 ・日本での生活で，どんな用途で・どのくらいの割合で日本語を使用するのか。留学生のニーズをもう一度調べなおす必要を感じた。

4．学生の反応

学生の反応を調べるために，毎回の授業終了後にアンケート調査を行い，全 3 回の授業終了時には映像を使った授業全体についてのフォローアップインタビューも併せて実施した。

4.1 アンケートについて

アンケートでは，（1）今日の授業について，（2）今日の映像教材について，（3）興味・関心についての 3 点を留学生に尋ね，反応を調査した。（1）と（2）は授業を実施するたびに記入してもらったが，（3）は好きな番組の

傾向を調べるために初回のみ答えてもらうことにした。回答は5段階評価（5が最高）で答えてもらうものと，文章記述形式で答えてもらうものとの2種類を用意した。記述式の回答欄は，思ったことを自由に書いてもらえるように，英語や中国語での回答も可とした。

4.2 アンケート結果

4.2.1 今日の授業について

今日行った授業については，学生に次の4点を質問した。（1）授業はよく分かりましたか，（2）授業で難しいところはありましたか（自由記述），（3）この授業は日本語が上手になるために役に立つと思いますか，（4）この授業は，みなさんの大学での研究や専門の勉強に役に立つと思いますか。(5段階評価＋理由を自由記述)

授業①

「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）

授業の理解度は5段階評価で4と5であり，ほとんど理解できていた。「授業で難しいところはありましたか」という質問には「このような内容で勉強するのは初めてだったので難しいと思った」，「ちょっと（スピードが）速かった」との回答が見られた。

「日本語が上手になるための役に立つと思いますか」，「研究や専門の勉強に役に立つと思いますか」という質問には2人ともそれぞれ5と高く評価しており，その理由は以下の通りであった。

- 今日の新しいことばは，（授業で）よく使いますから。私の参加している授業は全部日本語ですから，分かりにくいです。
- 本で習う言葉は生活の役に立ちますが，今日の授業は専門の役に立ちます。

授業②

「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）

この映像教材は，3つの中で最も分かり難かった教材のようであり，留学生の理解度は5段階評価の2と3に止まった。「授業で難しいところはありましたか」という質問に対しては2人とも「ことばが難しかったため，内容が分からなかった」と記入している。

だが，このように分かり難かったと答えたにも関わらず，「この授業は日本語が上手になるために役に立つと思いますか」という問いに対しては5と3で評価しており，専門分野の日本語も出来れば分かるようになりたいという学習者の心理を映し出した結果となった。

「この授業はみなさんの研究や専門の勉強の役に立つと思いますか」という質問については，評価が分かれた。上の質問で5と高い評価を付けた留学生は，「他の人に発表する時，意味が出るから（注：役に立つという意味）」という理由で，ここでも5と高い評価をしたが，一方，3と答えた留学生は「私の専門では，このことばはあまり使わないですから」とここでも2と低く評価した。

授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」（「鳥インフルエンザを封じ込めろ」）

この映像教材全体の理解度は，5段階評価では5と3であった。難しかったところとしては，「『～だ』『～である』など，ことばが難しい」「スピードが速い」ということが指摘されている。

「日本語が上手になるために役立つと思いますか」という問いに対しては2名とも5と高い評価をしており，また「研究や専門の役に立つと思いますか」という質問には4と評価している。その理由は，「今日の新しいことばは授業でよく使います」「日本で生活するのは便利になると思います」であった。

4.2.2 今日の映像教材について

ここでは，授業で使用した映像教材の内容が留学生にとって「面白かったか」，「理解できたか」，「難しかったところはどこか」という3点について調査を行った。理解できたかという質問については，さらに「a.授業で勉強した部分」，「b.授業で詳しく勉強しなかった部分」と2つに分けて感想を求めた。回答欄は5段階評価で作成したが，「難しかったところはどこか」という質問のみ自由記述形式にした。

授業①

「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）

2人とも5段階評価の5で，この映像教材は面白かったと答えている。授業で勉強した部分についての評価は5と4で，ほとんど理解できていた。詳しく勉強しなかった部分については4と2で評価が分かれた。

難しかったところは，文法と日本語のスピードであった。

授業②

「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）

「面白かったですか」という問いに対する答

えは，5段階評価で4と3であった。内容理解度は，授業で扱った部分に関しては4と3であったため大体理解できたことが分かるが，授業で詳しく扱わなかった部分については2と4と評価にばらつきが見られた。

この番組で難しかったところを挙げてもらうと，語彙，文法，日本語のスピード，内容と多岐に渡ったため，このクラスの学生にとっては，やや困難な教材であったと考えられる。

授業③

「プロフェッショナル・仕事の流儀」『鳥インフルエンザを封じ込めろ』

「面白かったですか」という質問に対する評価はそれぞれ5と4で，概ね好評であった。内容理解は，授業で扱った部分については5段階評価で5と4，詳しく扱わなかった部分は共に3であった。この映像教材で難しかった点は，語彙，文法，日本語のスピードであった。

4.2.3 興味・関心のある番組について

留学生が平素どのような番組に興味・関心を持っていて，授業で扱った映像教材のほかに，どのようなテレビ番組等の映像で日本語を勉強したいと思っているのかを調査するために，アンケート用紙の最後で，ジャンル別に選んでもらうことにした。

その結果，授業で取り上げてほしいジャンルとしては，ドキュメンタリー/教養番組，医療ドラマ，普通のドラマ，映画，クイズ番組，アニメ，ニュースなどが挙げられたが，自由記述欄には「日本の有名な所や面白い所を紹介してほしい」「ニュースが分からないので，授業でやってほしい」「人物や物などを紹介するような番組をしてほしい」との意見が寄せられた。

また,このような映像を使った授業については，もっと実施してほしいとの共通した意見が書かれてあった。

4.3 フォローアップインタビューについて

映像を使った全ての授業終了後，学生の生の声を聞くためにフォローアップインタビューを実施した。授業については，次のような意見や感想が出された。

- 面白く勉強になった。映像を使った授業は，今後も時々やってほしい。
- 授業②の映像教材は，ことばが難しかった。
- 授業①は授業②に比べて分かりやすかった。図解による説明が多かったから。
- 授業①の映像教材の内容については，授業後，研究室の先生や他の人にも話して聞かせた。みんなは全く知らなかったので，とても驚いていた。
- 授業③はドキュメンタリーで面白かった。またこのようなものが見たい。
- 映像教材の内容は，医・科学系に特定しなくてもかまわない。普通のドラマにも面白いものがあると思う。
- ドラマの日本語は日常使う言葉なので，特に教室で扱う必要はない。それに比べ，テレビのニュースは未だに分からない言葉が多く，あまり理解できない。教室で扱ってもらえれば有難い。

また，今回使用した3つの映像教材を難易度順に挙げてもらったところ，一人の学生（学生A）は，一番難しかったのは授業②で，次に授業①，授業③の順であった。もう一人の学生（学生B）が一番難しいと思ったのは，同じく授業②であったが，その次は授業③，授業①の順であった。そこで，一番面白かったものを尋ねてみると，学生Aは授業③，学生Bは授業①と答え，ここから，それぞれが一番易しいと思った映像教材は一番面白いと思ったものと一致していたことが判明した。

さらに，タスクシートに抽出した文の長短が，内容の理解度を左右したかどうかについても質問を行った。タスクシートは，本来学習項目だけに焦点を絞って準備したものであるが，文のまとまりという観点から見直してみると，授業①のものが最も長く，他の2つの授業のものは数行ずつ部分的に抜き出しただけものであった。これについては予想通り2名から「抽出した文が長いほうが内容理解もしやすかった」という回答が得られた。

4.4 アンケートとフォローアップインタビューの結果についての分析

留学生に対するアンケートとフォローアップインタビューの結果，以下のことが明らかになった。

映像を使った授業に対する反応は概ね良く，今後もこのような授業を時々実施してほしいと考えている。教科書を使った授業は日常生活を送るための役に立つが，今回実施したような医・科学系の映像教材は大学での研究や専門の勉強の役に立つと思っている。ただし，内容が自分の関わる分野と離れ過ぎている場合には，意義が感じられない場合がある。

授業で取り上げてほしい分野としては，ドキュメンタリー/教養番組，医療ドラマ，普通のドラマ，映画，クイズ番組，アニメ，ニュースな

どが挙げられたが，フォローアップインタビューでは，とりわけドキュメンタリー/教養番組，医療ドラマ，普通のドラマ，ニュースといったジャンルに対する要望の声が強かった。

医・科学系の映像教材の場合，使われている語彙が難しいことが難点の一つとして挙げられる。授業で扱った映像教材の内容をある程度理解し，さらに面白いと思えるかどうかは，個人の嗜好や専門と密接な関係があるようだ。3つの教材のうち，学生Aは授業③が一番面白く分かりやすかったと答えているが，フォローアップインタビューの結果，平素からドキュメンタリー番組を見るのが好きなことが分かった。また，学生Bは授業①が一番面白く分かりやすかったと答えているが，フォローアップインタビュー時に，「授業①は，自分の専門でよく使う語彙が多用されていたから面白かった」と話している。

その他，内容の理解度を上げるためには，図解を多用した映像教材を取り上げたり，タスクシートである程度まとまった文を塊で抜き出すといったことも効果的であることが，今回の結果から明らかになった。

5．終わりに

本研究は，教科書を使用しない時間を使って，中級レベルの留学生に日本語学習に対する一層の意欲を持たせる方法を模索する視点から始まった。特に対象が医・科学系の留学生であるため，専門分野の日本語によりアクセスしやすくなる活動を考えた。これまでの教室活動とは異なる映像教材を使うことで，学生の学習の動機付けも高まると予想した。そこで，医・科学系の映像教材3つを準備し，実際に授業を行い，教師と学生の双方から授業の内容などについての意見を聞いた。今回は授業への参加人数が少なかったため，映像教材作成の流れと学生の反応の傾向を見る研究になった。

教師の感想からわかったことは，映像教材を準備する手間と難しさがあるということだ。映像素材を見つけ，それを分析して教材化することは確かに手間と時間がかかる。しかしながら，このような作業を通して，教師はどんなカリキュラムやシラバスで日本語を教えていくのかを考える機会を持つことができる。当然教科書をベースにした授業は大切であり効果的だが，このような新しい試みを行うことで，自分の授業の内容，教え方，情報の提示の仕方などを振り返り，効果的な授業形態を考え直すことができる。事実，この映像教材を使った授業を行うことで，筆者である我々日本語教師3名は何回もミーティングを開いて共に教材を作成する機会を持つことができ，授業後には授業の振り返りをすることもできた。

学生の反応はおおむね好評だったと言えよう。学生の専門に完全に合致したものではなかったものの，比較的彼らの関心や興味に近い素材を通して日本語の学習を進めることができ，学生の満足度も高かったと思われる。

一方，今回の試みから様々な問題点と課題が浮かび上がった。まず，この授業の計画当初から考慮していた点だが，このような映像教材を使用したクラスが，日本語の「運用能力」にどのようにつながるかという問題である。映像教材を使用した授業の弱点は，映像を見てそれを理解しただけでは，日本語の運用につながらないという点にある。映像を見るという行為自体には，能動的な働きかけは少なく，必ずしも「使える日本語」には直結しない。この点を考慮し，今回の試みでは，当初から留学生が将来出会うかもしれない専門的なトピックを選び，それが自分たちと関係していることを自覚させることを考えた。学んでいる内容ー語彙や文法を含めてーを自分の中に取り込む作業をしてほしいと考えた。アンケートからみると，この目的はある程度達成できたのではないかと考える。また，視聴後には見たことをトピックとして会話につなげることができた。今後の課題の一つは，映像教材をどのように「運用能力」の向上につなげるかということである。

別の課題は，医歯薬系の留学生だから医・科学系の映像が効果的であるとは安易に断言できないことである。アンケートではこのような“難しい専門的な”内容ではなく，ドラマやニュースを使って授業をしてほしいという声もあった。本研究で課題としたのは，留学生のニーズにあった授業ができたかどうか，ということである。少しでも専門に近い教材を使えば留学生の興味や関心，日本語への動機づけが高まり，日本語学習が進むと考えたが，実はこの試みをする前段階で留学生のニーズを的確に把握することができていなかった。そのために，留学生に興味があるだろうと考えたものが，実際にはそうではなかった，ということもありうる。

今後の課題は，まず留学生のニーズ調査を行うことである。医歯薬系の留学生は生活の中でどのくらいの割合で日本語を使っているのか，例えば授業，ゼミ，先生との会話，家族や友人との会話の際に，どの程度日本語を使用しているのか，また必要とされているのかについて詳

しく調査したい。そうすることで，留学生が直面する日本語使用の具体的な場面を探ることができ，使用すべき教材の内容や難易度も知ることができるであろう。

加えて，映像教材の弱みのひとつである使用方法についても検討する必要があるだろう。映像素材は多くの場合「旬」の情報を提供するものであり，放送後（あるいはビデオ・DVDのリリース後）その情報は古くなってしまう。「数回の使用のみで教材が使われなくなってしまう可能性」があると小原(2007)も述べている。教材作成の負担が大きい割には，長く使うことが難しい面もある。このような問題点に関しても，内容や素材などを含めて検討を続けていきたい。

今回の試みでは，教材の選択，作成，授業での実践，教師の振り返りと学生の反応の記録を残すことができた。一連の流れを把握し，いくつかの課題を見つけることができたので，今後はさらに学習者のニーズに配慮した効果的な映像教材の選択と作成を行い，学生に合った新しい映像教材の開発を行っていきたい。

【使用番組・DVD】

授業①　「解体新ショー」（「女性には赤いバラを」）NHK　2008年12月19日放送

授業②　「サイエンスZERO」（「疲労に迫れ」）NHK　2008年9月26日放送

授業③　「プロフェッショナル仕事の流儀－WHO医師進藤奈邦子の仕事　鳥インフルエンザを封じ込めろ」2006年　NHK　DVD

【参考文献】

有賀千佳子（1990）「中級における映像教材活用の可能性－ドラマ素材を用いた授業の一例」『日本語教育』71，pp.210-224，日本語教育学会

石黒圭（2004）『よくわかる文章表現の技術Ⅰ表現・表記編』明治書院

石黒圭（2007）『よくわかる文章表現の技術Ⅴ文体編』明治書院

大坪一夫（1996）「日本語教育における録音・録画教材の利用」『日本語学』15巻4号，明治書院

小原律子（2008）「日本語教育における学習素材としての映像メディア：映画・テレビ番組の教材化」『倉敷芸術科学大学紀要』13，pp.205-214，加計学園倉敷芸術科学大学

加藤由香里（1999）「会話授業におけるメディアに対する性格づけについて」『ICU日本語教育研究センター紀要』8，pp.47-57，国際基督教大学

国立国語研究所日本語教育センター（1992）『映像教材モニター報告』国立国語研究所日本語教育センター日本語教材開発室

小林典子（1990）「テレビドラマによる聴解授業の実践報告：「生」教材を初級後期，中級，上級で使用して」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』5，pp.99-113

高橋純子（2006）「テレビドラマ聴解の授業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』21，pp.77-96，筑波大学留学生センター

田中恵子（2007）「テレビ番組のビデオを用いた聴解授業」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』3，pp.36-49

中道真木男（1991）「日本語教育と映像教材」『日本語学』10巻9号，明治書院

保坂敏子・土井真実（2001）「映像素材を使用した学習活動に対する学習者から見たビリーフ：教室場面の学習活動の場合」『小出記念日本語教育研究会論文集』9，pp.25-39，小出記念日本語教育研究会

山下早代子（1992）「ビデオ教材の可能性：ICU初級日本語映像教材“イメージ”(試用版)をめぐって」『ICU日本語教育研究センター紀要』2，pp.143-154，国際基督教大学

吉岡英幸（1992）「専門教育への橋渡しのためのビデオ教材の可能性」『講座日27分冊』，pp.18-30，早稲田大学日本語研究教育センター